

漱石全集

第十四卷

漱石全集
第十四卷

評論
雜篇



昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月五日發行



漱石全集第十四卷

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

東京市神田區南神保町十六番地

右代表者

岩波茂雄

東京市本所區番場町四番地

印刷者

井上源之丞

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

目次

評

論

七

作物の批評

九

寫生文

一七

文藝の哲學的基礎

二四

創作家の態度

七九

田山花袋君に答ふ

一五〇

コンラツドの描きたる自然に就いて

一五二

明治座の所感を虚子君に問はれて

一五四

虚子君へ

一五八

太陽雜誌募集名家投票に就いて

一六三

『額の男』を読む

一七〇

一

「夢の如し」を読む

日英博覽會の美術品

東洋美術圖譜

客觀描寫と印象描寫

草平氏の論文に就いて

文藝とヒロイツク

艇長の遺書と中佐の詩

鑑賞の統一と獨立

イズムの功過

好惡と優劣

自然を離れんとする藝術

博士問題とマードツク先生と余

マードツク先生の日本歴史

二

一七五

一七八

一八一

一八四

一八七

一八九

一九二

一九五

一九八

二〇一

二〇五

二〇九

二一六

博士問題の成行

二二一

文藝委員は何をするか

二二四

田中王
堂氏の「書齋より街頭へ」

二三一

坪内博士とハムレット

二三四

學者と名譽

二三九

道樂と職業

二四二

現代日本の開化

二六一

中味と形式

二八二

文藝と道德

三〇〇

文展と藝術

三一九

素人と黒人

三四五

私の個人主義

三五四

津田青楓君の畫

三八一

點頭錄

雜
篇

入社の辭

元日

余と萬年筆

「幻影の盾」自序

浦瀨
白雨譯「ヲーヅヲースの詩」序

「吾輩は猫である」上篇自序

「漾虛集」自序

「吾輩は猫である」中篇自序

「鶉籠」自序

鈴木三
重吉作「千代紙」序

平井著「野葡萄」序

四二三

「吾輩は猫である」下篇自序

四二五

藪十野著「東京見物」序

四二六

本間久四郎譯「名著新譯」序

四二八

森田草平生田共著「草雲雀」序

四三〇

生田著「文學入門」序

四三二

高濱著「鷄頭」序

四三五

松根東「新春夏秋冬」夏之部序

四四四

樋口著「俳諧新研究」序

四四六

森田著「煤煙」第一卷序

四四七

中村畫「不折俳畫」序

四五〇

長塚節氏の小説「土」

四五二

池邊君の史論に就いて

四五五

「土」に就いて

高原操著「極北日本」序

「社會と自分」自序

野上重子譯「傳説の時代」序

米窪刀雄著「海のロマンス」序

岡本一平著並畫「探訪畫趣」序

「心」自序

木村恒譯「南國へ」序

木下太郎著「唐草表紙」序

植松安譯「文藝批評論」序

縮刷に際して

「金剛草」自序

評

論

作物の批評

中學には中學の課目があり、高等學校には高等學校の課目があつて、之を修了せねば卒業の資格はないとしてある。その課目の數やその安排の順は皆文部省が制定するのだから各擔任の教師は委託をうけたる學問を其時間の範圍内に於て出來得る限りの力を盡すべきが至當と云はねばならぬ。

然るに各課擔任の教師は其學問の専門家であるが爲め、専門以外の部門に無識にして無頓着なるが爲め、自己研究の題目と他人教授の課業との權衡を見るの明なきが爲め、往々わが範圍以外に飛び超えて、わが學問の有效を、他の領域内に侵入して迄も主張しやうとする事がある。たとへば英語の教師が英語に熱心なるの餘り學生を鞭撻して、地理數學の研修に利用すべき當然の時間を割いて迄も難句集を暗誦させる様なものである。たゞに夫のみではない、わが專攻する課目の外、わが擔任する授業の外には天下又一の力を用ゐるに足るものなきを吹聴し來るのである。吹聴し來る丈ならまだいゝ。果はあらゆる他の課目を罵倒し去るのである。

かゝる行動に出づる人の中で、相當の論據があつて公然文部省所定の課目に服せぬものはこゝに引き合に出す限りではない。それ程の見識のある人ならば結構である。四角に仕切つた芝居小屋の櫓見た様な時間割のなかに立て籠つて、土龍の如く働いてゐる教師より遙かに結構である。然し英語丈の本城に生涯の尻を落ちつけるのみならず、櫓から首を出して天下の形勢を視察する程の能力さへなきものが、徒らに自尊の念と固陋の見を縋り合せたる如き没分曉の鞭を振つて學生を精根のつく限りたゞいたなら、はじめなのは學生である。熱心は敬服すべきである。精神は嘉すべきである。其善意的なるも亦多とすべきであ

る。あるにも拘らず學生は迷惑である。當該課目に於ける智識が缺乏する爲めではない、當該課目以外の智識が全然缺乏してゐるからである。たゞ缺乏してゐるからではない。其結果として入らぬ所迄のさばり出て、要もない課目を打ちのめさねば已まぬ底の勇氣があるから迷惑なのである。

是等の人は自己の主張を守るの點に於て志士である。主張を貫からんとするの點に於て勇士である。主張の長所を認むるの點に於て智者である。他意なく人の爲めに盡さんとするの點に於て善人である。只自他の關係を知らず、眼を全局に注ぐ能はざるが爲め、わが繩張りを設けて、いゝ加減な所に幅を利かして満足すべき所を、足に任せて天下を横行して、憚からぬのが災になる。人が咎めれば云ふ。おれの地面と君の地面との境はどこだ。境は自分がきめぬ丈で、人の方ではとうから定めてゐる。再び咎めれば云ふ。此通り足が達者でどこへでも歩いて行かれるぢやないか。足の達者なのは御意の通りである。足に任せて人の畠を荒らされては困ると云ふのである。かの志士と云ひ、勇士と云ひ、智者と云ひ、善人と云はれたるものも是に於てか忽ちに浪人となり、暴士となり、盲者となり、惡人となる。

今の評家のあるものは、ある點に於て此教師に似て居ると思ふ。尤も尊敬すべき言語を以て評家を翻譯すれば教師である。尤も謙遜したる意義に於て作家を解釋すれば生徒である。生徒の點數は教師によつて定まる。生徒の父兄朋友と雖も此權利を奈何ともする事は出來ん。學業の成績は一に教師の判斷に任せて不平をさしはさまざるのみならず、却つて之によつて彼等の優劣を定めんとしつゝある。一般の世間が評家に望む所は正に是に外ならぬ。

たゞ學校の教師には専門がある。擔任がある。評家はこゝ迄發達して居らぬ。たまには詩のみ評するもの、劇のみ品するものもあるが、然しそれすら寥々たるものである。のみならず是等の分類は形式に屬する分類であるから、専門として獨立する價值があるかないか既に疑問である。して見ると、つまりは純文

學の批評家は純文學の方面に關するあらゆる創作を檢閲して採點しつゝある事になる。前例を布衍して云ふと地理、數學、物理、歴史、語學の試験を只一人で擔任すると同様な結果になる。

純文學と云へば甚だ單簡である。然し其内容を論ずれば千差萬別である。實は文學の標榜する所は何と何で其表現し得る題目は如何なる範圍に跨がつて、其人を動かす點は幾ヶ條あつて、是等が未來の開化に觸るゝときどこ迄押擴け得るものであるか、未だ何人も組織的に研究したものが居らんのである。また頗る出来にくいのである。

かう云ふては分らんかも知れぬ。例を舉げて二三を語ればすぐに合點が行く。古い話であるが昔しの人
は劇の三統一と云ふ事を必要條件の様に説いた。所が沙翁の劇は是を破つてゐる。しかも立派に出来てゐる。して見ると統一が劇の必要であると云ふ趣味から沙翁の作物を見れば失望するにきまつてゐる。或は駄作になるかも知れぬ。然し是が爲めに統一論の價値がなくなつたのではない。其價値がモヂフハイされたのであると思ふ。だから此條件を充たした劇を見れば矢張それなりに面白い。其代り沙翁の劇を賞翫する態度でかゝつてはならぬ。讀者の方で融通を利かして、其作物と同じ平面に立つ丈の餘裕がなくてはならぬ。外に一例をあける。又沙翁を引合に出すが、あの男のかいたものは頗る亂暴な所がある。劇の一段がたつた五六行で、始まるかと思ふとすぐ仕舞はねばならぬと思ふのに、作者は大膽にも平氣でいくらでも、こんな連鎖を設けてゐる。無論マクベスの發端の様に行數は短かくても、興味の上に於て全篇を貫く重みのあるものは論外であるが、平々凡々たる而も十行内外の一段を設けるのは、話しの續きをあらはす爲め已を得ず挿入したのだと見え透く様に思はれる。換言すれば彼の戯曲のあるものは齣幕の組織に於て明かに比例を失してゐる。だから比例丈を眼中に置いてマーチャント、オフ、ゼニスを読むものは必ず失敗の作だと云ふだらう。マーチャント、オフ、ゼニスは此點から讀むべきものでないと云ふ事がわかる。

又沙翁を引き合に出す。オセロは四大悲劇の一である。然し讀んで決して好い感じの起るものではない。不愉快である。(今は其理由を説明する餘地がないから略す。)もし感じ一方を以てあの作に對すれば全然愚作である。幸にしてオセロは事件の綜合と人格の發展が非常にうまく配合されて自然と悲劇に運び去る手際がある。讀者は夫を見ればいゝ。日本の芝居の仕組は支離滅裂である。馬鹿々々しい。結構とか性格とか云ふ點からあれを見たならば抱腹するのが多いだらう。然し幕に變化がある。出來事が走馬燈の如く人を驚かして續々出る。こゝ丈を面白がつて、その外を忘れて居れば矢張り幾分の興味がある。一九は御覽の通りの作者である。一九を讀んで崇高の感がないと云ふのは非難しやうもない。崇高の感がないから排斥すべしと云ふのは、文學と崇高の感と内容に於て全部一致した曉でなければ云へぬ事である。一九に點を與へるときには滑稽が下卑であるから五十とか、諧謔が自然だから九十とかきめなければならぬ。メリメのカルメンはカルメンと云ふ女性を描いて躍然たらしめてゐる。あれを讀んで人生問題の根元に觸れてゐないから駄作だと云ふのは數學の先生が英語の答案を見て方程式にあてはまらないから落第だと云ふ様なものである。デ、フォーは一種の寫實家である。ロビンソンクルーソーを讀んでテニソンのイノック、アーデンの様に詩趣がないと云ふ。こゝ迄は成程と降参せねばならぬ。然し夫だからロビンソンクルーソーは作物にならないと云ふのは歌麿の風俗畫には美人があるが、ギド、レニのマゲダレンは女になつて居らんと主張する様なものである。——例を挙げれば際限がないから已める。

作家が評家に呈出する答案は斯の如く多種多面である。評家は中學の教師の如く部門をわけて採點するか又は一人で物理、數學、地理、歴史の智識を兼ねなければならぬ。今の評家は後者である。苟も評家であつて、専門の分岐せぬ今の世に立つからには、多様の作家が呈出する答案を檢閲するときに方つて、色色に立場を易へて、作家の精神を汲まねばならぬ。融通のきかぬ一本調子の趣味に固執して、その趣味以

外の作物を一氣に抹殺せんとするのは、英語の教師が物理、化學、歴史を受け持ちながら、凡ての答案を英語の尺度で採點して仕舞ふと一般である。其尺度に合せざる作家は悉く落第の悲運に際會せざるを得ない。世間は學校の採點を信する如く、評家を信するの極途に其落第を當然と認定するに至るだらう。

是に於て評家の責任が起る。評家は先づ世間と作家とに向つて文學は如何なる者ぞと云ふ解決を與へねばならん。文學上の述作を批判するに方つて（詩は詩、劇は劇、小説は小説、凡てに共有なる點は共有なる點として）批判すべき條項を明かに備へねばならぬ。恰も中學及び高等學校の規定が何と何と、これこれとを修め得ざるものは學生にあらずと宣告するが如くせねばならん。此條項を備へたる評家は此條項中のあるものに就て百より〇に至る迄の點數を作家に附與せねばならん。此條項のうちわが趣味の缺乏して自己に答案を検査するの資格なしと思惟するときは作家と世間とに遠慮して點數を付與する事を差し控へねばならん。評家は自己の得意なる趣味に於て専門教師と同等の權力を有するを得べきも、其繩張以外の諸點に於ては知らぬ、わからぬと云ひ切るか、又は何事をも云はぬが禮であり、德義である。

是等の條項を机の上に貼り附けるのは、學校の教師が、學校の課目全體を承知の上で、自己の受持に當る様なもので、自他の關係を明かにして、文學の全體を一目に見渡すと同時に、自己の立脚地を知るの便宜になる。今の評家は此便宜を認めてゐない。認めても作つてゐない。只手當り次第にやる。述作に對すると思ひ付いた事をいゝ加減に述べる。だから評し盡したのだから、まだ残つて居るのか當人にも判然しない。西洋も日本も同じ事である。

是等の條項を遺憾なく揃へる爲めには過去の文學を材料とせねばならぬ。過去の批評を一括して其變遷を知らねばならぬ。従つて上下數千年に涉つて抽象的の工夫を費やさねばならぬ。右から見てゐる人と左から眺めてゐる人との關係を同じ平面にあつめて比較せねばならぬ。昔しの人述作した精神と、今の人

の支配を受くる潮流とを地圖の様に指し示さねばならぬ。要するに一人の事業ではない。一日の事業でもない。

此條項を備へたる人にして始めて、此條項中に差等をつける事を考へてもよいと思ふ。人力も人を載せる。電車も人を載せる。兩者を知つたものが始めて兩者の利害長短を比較するの權利を享ける。中學の課目は數に於て極まつてゐる。時間の多少は一樣ではない。必要の度の高い英語の如きは比較的多くの時間を占領してゐる。批評の條項に就いても諸人の合意で此等の高下を定める事が出来るかも知れぬ。(出來ぬかも知れぬ。) 崇高感を第一位に置くもよい。純美感を第一にするもよい。或は人間の機微に觸れた内部の消息を傳へた作品を第一位に据ゑてもよい。或は平々淡淡のうちに人を引き着ける垢抜けのした著述を推すもよい。猛烈なものでも、沈靜なものでも、形式の整つたものでも、放縱にしてまとまらぬうちに面白味のあるものでも、精緻を極めたものでも、一氣に呵成したものでも、神祕的なものでも、寫實的なものでも、臆のなかに影を認める様な模糊たるものでも、青天白日の下に掌をさすが如き明瞭なものでもいゝ。――相當の理由があつて第一位に置かんとすれば、相當の理由があつて等差を附するならば差支ない。但し出来るか出来ぬかは疑問である。

是等の條項に差等をつけると同時に是等の條項中のあるものは性質に於て併立して存在すべきも、甲乙と從屬せしむべきものでないと云ふ事に氣が付くかも知れぬ。然も其併立せるものが一見反對の趣味で相容れぬと云ふ事實も認め得るかも知れぬ――批評家は反對の趣味も同時に胸裏に蓄へる必要がある。

物理學者が物質を材料とする如く、動物學者が動物を材料とする如く、批評家も亦過去の文學を材料として以上の條項と此條項に從て起る趣味の法則を得ねばならぬ。去れども此條項と此法則とは過去の材料より得たる事實を忘れてはならぬ。從つて古に拘泥してあらゆる未來の作物に是等を應用して得たりと思